神に気に入られた竜!!

水無月 皐月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神に気に入られた竜！！

【Nコード】

N0037L

【作者名】

水無月 皐月

【あらすじ】

幼竜の記憶がない白い美しい竜、ヴェルーナ。

美しい故、たくさんの竜からプロポーズを受けていた。

それが嫌になって住処から離れた森に住む事にした。

そこで、とても綺麗な鏡を見つける。

鏡には、神が宿っていた。

その神に、「お前は人間だ。」と言い渡され・・・

ヴェルーナは元の姿に戻り、幸せに暮らすことができるのか。

俺様な神と元人間の竜と、ヴェルーナ好きの皇子様が織りなす恋

愛ファンタジー。

神との出会い(1)

白い鱗が、月夜に当たって美しさを増す。
そこに一匹の竜が近づく。

「ゲルルル、ガウウウウウウ？（ヴェルーナ、俺と交尾しないか？）」

これで、5回目だ。深い深い青い瞳で、彼を睨む。
彼は、真つ赤な鱗に黄色い瞳のモテ男だ。

「ゲウウウウウ（しつこいわよ）」

冷たく言い放つ。これも、5回目。

「ガウウウウウ、ゲルルルルル。（なぜ私が、ビルクと交尾しなきゃいけないの。）」

これまた、5回目。

「ゲウウウ・・・」

ビルクは、肩を落としながら去って行った。
ヴェルーナは、溜息を漏らした。

何度、ビルクが言った台詞を聞いたか。

ビルク以外にも、数え切れないほどの台詞を聞いた。
聞き飽きた程だ。

雌竜に、嫌味も言われた。

雄竜に、興味もない。

他の雌竜が、うつとりする雄竜にも興味がない。

雄竜に、告白されているとき雌竜に見られていた。

もちろん、そいつは振った。が、そのあと見ていた雌竜が、

「なんて、もつたいない。」

と、皮肉を込めて言われた。

その竜は、皆に言った。毎日、冷やかしを受けた。

が、そんなこと大した事じゃない。無視すればいいだけだから。

今思い出すと、ものすごくうるさかった。

そんなことを考えていると、後ろから視線を感じた。

後ろを見ると、ビルクがいる。こちらをじっと見ている。

ビルクと、目があった。

ビルクは、モテ男だ。

他の雌竜が、告白されたらOKするだろう。

きつと雌竜が、先ほどのやり取りを聞いていたらまた、

「もつたいない」

と、言うだろう。皮肉を込めて。

ヴェルナーは、考えた。

一人で、ひっそり暮らせないかと。

しばらく考えていると、いい案が浮かんだ。

（確か、しばらく行った所に森があったはず。）

思い立ったら何とやら。森を目指して空を飛ぶ。

神との出会い(1)(後書き)

感想いただけるとうれしいです。

神との出会い(2) (前書き)

お気に入り登録していただけると、うれしいです。
ヴェルーナが鏡を拾います。

神との出会い(2)

やっと、森に着いた。森に着くのには、三日掛かった。今は、昼だ。暖かい日差しが、木々の間から射しこんでくる。

(まずは、寝床ね。)

寝床に適した場所を探すため、森の中を歩きだす。

飛べるには飛べるが、丸三日飛び続けたから羽を動かしたくない。ヴェルーナは、木より小さい。ヴェルーナだけではない。

ここら一体の竜は皆そうだ。ヴェルーナは、『古竜』だ。三日前の、うざい男もそう。

『古竜』は、とても珍しい。普通の竜より小さい。が、さまざまな物に姿を変えられる。

もちろん、人間にもなれる。

しばらく歩くと、大きな湖が出てきた。とても澄んでいる。

湖の淵に沿って歩いてみると、近くに窪地を見つけた。ヴェルーナの大きさに、ぴったりだ。

窪地に、草をひきつめる。と、草の中できらりと何か光る。

手を伸ばして拾うと、綺麗な鏡だった。花の模様が、施された美しい鏡。

鏡に見入っていると、鏡が突然光った。

夢の中で、誰かが呼んでいる。

「おいっ
」

銀色の髪に、青い瞳。美青年だ。

「お前は、今日から『神竜』だ。」

彼の姿が、ぼやけていく。

目が覚めた。空が赤く染まっている。

このまま寝ようと思った。が、おでこのところが、急に熱くなっ
た。

先ほど拾った鏡を、手に持っていたので鏡を見る。
鏡を見て、目を丸くした。

おでこに、青い物が付いている。取るうとしても、全く動かない。
その時、さつき見た夢を思い出した。青年は、『神竜』と言っ
ていた。

昔、育ててくれたおばさんが言っていた。

『神竜とは、神に認められた竜の事。誰もが敬う竜よ。その証に、
青い珠が体のどこかに付くの。』

と。

(て、ことは・・・私は、神竜？)

そんなことを考えていると、鏡から銀色の丸い物が出てきた。

ふよふよと、浮いている。ひっくりかっただと思っただら、一對の青い眼が出てきた。

ヴェルーナよりも、深い青い眼。

ヴェルーナは、眼を細める。

(何これ・・・・・・)

生き物？などと考えていると、玉が喋り出した。

「ふんっ、我は神に決まっているだろう。」

(神って・・・)

「神は神だ。」

俺様口調だ。しかも、上から目線。

「お前は、俺の竜だ。」

これが、神との出会い。

箱庭の外は騒がしい

神竜になってから、一か月。

ここの森の暮らしには、慣れた。

ここの森は、人々は『箱庭』と呼んでいるらしい。

このことは、あの俺様の神が教えてくれた。

名前の由来は、森の周りが大木で囲まれているから。

ヴェルーナは、一度それを確かめるため森の周りを飛んだ。

確かに、大木が森を囲んでいた。

箱庭は、神聖な場所らしい。

入るのも許可が必要で、滅多に人は入ってこない。

それに、不思議な生き物もいる。

例えば、頭と胴体が虎。しかも、頭は二つ。

尻尾は、蛇の変な生き物。

普通の生き物も居るが。

ヴェルーナの日課は、小鳥と一緒に昼寝をすること。

毎日、昼寝をしていた。

ヴェルーナは、いつものように昼寝をしていた。

薄目を開けて、小鳥たちを観察する。

小鳥が動いたたびに、心が癒される。

小鳥が、度々ヴェルーナをつつく。

それもまた、癒される。

と、爆発音が聞えてきた。

小鳥は、驚いて逃げる。

ヴェルーナは、イラついた。

癒しのひと時を、邪魔されたのだ。

まだ爆発音が聞える。

続いて銃声。悲鳴も聞こえてきた。男のものだ。

どうやら、箱庭の外から聞こえるらしい。

ヴェルーナは、木よりも高く空を飛んだ。

箱庭の外を見る。死体が転がっている。

血が森を囲っている大木に付いている。

女、子供は居ない。

男だけ。

戦争をしているのだろう。

気が付いたらヴェルーナの横に、神がいた。

「むごいな」

神が言った。

「ええ」

返事をする。

両方の戦力は互角だ。

どんどん兵士が減っていく。

このままじゃ、全滅するだけ。

意味がない。

ヴェルナーは、戦争が終わるまで見ていた。

結局、引き分け。

ヴェルナーは、また眠りについた。

彼との出会い

ヴェルーナは、眼を覚ました。

もう、日が昇っている。

昨日のことを考えると、吐き気がした。

まあ、吐くことはないけれど。

ヴェルーナは起き上がり、湖の方へ歩く。

水浴びをするためだ。

これもまた、ヴェルーナの日課だ。

水浴びの後は、散歩だ。

そのあとに、温かそうな場所を見つけ昼寝をする。

ヴェルーナが、散歩をしていると血の匂いがした。

ヴェルーナは、思わず顔を顰めた。

何故かって？

それは、ヴェルーナの目の前に血まみれの男がいるからだ。

きつと、貴族だろう。

服装が、煌びやかだ。

ヴェルーナは、死んでいると思った。

だが、胸が上下していた。

ここに置いていても邪魔なだけだ。

ヴェルーナは、仕方なく寢床に連れていくことにした。

ヴェルーナは、慎重に運んだ。

途中で起きても、面倒だからだ。

寢床に連れていくと、神がいた。

「何だ、そいつは。」

明らかに、不機嫌だ。

「倒れてた。」

簡単に言う。

「捨ててこい。」

さらに不機嫌になった様だ。

「私の自由だろ。」

「どうなっても知らないぞ。」

そう言い残して、消えた。

ヴェルーナは、起きた時のため木の実を用意した。
寝床の横に丸くなる。

しばらくして、うめき声が聞えてきた。
ヴェルーナは、起き上がった。

寝床の方を見ると、男が体を起こそうとしている。
起き上がるのを、座りながら見守った。

男が、ヴェルーナの方を見ると悲鳴を上げた。

「わあ！」

男は、後ずさりした。

(案ずるな、お前など取って食ったりしない。)

テレパシーで言う。

「本当か？」

(フンツ。お前など美味しいわけなからう。用心深い奴め。)

ヴェルーナは、鼻を鳴らした。

(お前、名は？)

「リュシオンだ。リュシオン・ル・アヴェルト＝ダントン。お前の名は？」

(ヴェルーナだ。)

これが、彼……リュシオンとの出会い。

リュシオンは皇子さま。(前書き)

最近、運動会の練習などで大変疲れてる。
やっとの更新。

リュシオンは皇子さま。

ヴェルーナは、リュシオンの面倒を看ることにした。

リュシオンの傷は、十か所。

切られた傷や、撃たれた傷がほとんどだ。

と、一つだけ他の傷とは違い、背中の端から端まで大きく切られた傷があった。

その傷は、治りかけだった。

ヴェルーナは、不思議に思った。

背後を取られるなど、戦に出るものとしての恥。

しかも、傷は治りかけ。

(この背中の傷はどうしたんだ?)

リュシオンに聞いた。

「ああ、その傷か。それは俺の父、ダントン国の王、シュベルツ・ル・アヴェルト＝ダントンの切られた傷だ。」

(何故、お前の父はお前を切ったのだ?)

「俺が、戦争に行くと言ったからだよ。「戦争に行くなら、これに耐える。」と言って、切りかかってきたんだ。まあ、なんとか生き延びたが。」

(お前は、王族か?)

「ああ、俺はダントン国第一皇子、リュシオン・ル・アヴェルト
「ダントンだ。何時から気が付いていた？俺は、言った覚えはない
が。」

(ふん、そんなの簡単だ。お前のその髪だ。)

「髪？」

(お前は知らぬのか？金は、王族の色なのだぞ。勉強不足だな。
よく、皇子などやれたものだ。)

「そうだったのか……。それなら……。」

(それなら?)

「それなら、お前は王族になるのか？」

(何を言っている。私の色は、白だ。王族ではない。)

「何を言っているんだ。お前の色は、白金だぞ。決して白ではな
い。」

(白金だと？私の何処に白金がある。)

「お前の鱗だ。」

(そんなわけないだろう。私は白だ。)

「いや、白金だ。」

(白だ。)

「白金だ。」

「グギャーーーー！！！！(白だ！！)」

ヴェルナーの怒声に、リュシオンは肩を震わせた。

その日以来、リュシオンはヴェルナーは白金だと言わなくなった。

神の名前は・・・(前書き)

PCを修理に出していたので、遅くなりました。

神の名前は……

リュシオンの傷の回復は、早かった。

きつと、箱庭の薬草を使ったからだろう。

背中傷は、一番早く治った。

リュシオンは、少しなら歩けるほどに回復した。

そんな時、

「ヴェルーナの神は、誰なんだ？」

と、突然聞いてきた。

ヴェルーナは考えた。

神から、何も聞いていないからだ。

わかることは、丸いことと、青い瞳。銀色なことだけだ。

（知らん。わかることは、丸いことと、青い瞳。銀色なことだ。

ああ、あと俺様だ。）

「うーん。銀色に青……。」

リュシオンは、黙り込んでしまった。

三十分後。

「あ！その神はきつと……。」

リュシオンが口を開いたのと同時に、

「フンツ。俺様の名前が知りたいのか。」

リュシオンとヴェルーナは、同時に上を向いた。そこには、銀色の玉が浮いていた。

「俺の名は、ダルド。俺は、人間供の間でも有名だろ。」

「……。はい。その通りです。」

リュシオンは、膝を付けて礼をした。

「お前、名は？」

「リュシオン・ル・アヴェルト＝ダントンです。ダルド様。お目にかかれて光栄です。」

「ダントン……。ダントン国の王族か。お前は、じき王になるだろう。」

「ありがたきお言葉。」

ダルドが、ヴェルーナの方を向いた。

「ヴェルーナ。お前、幼童の記憶はあるか？」

（いいや、ない。親の顔も覚えていない。）

「そうか。そろそろ、行かなくては。」

(どうかしたか?)

「別に、大した用はない。邪魔したな。」

そう言うと、あっという間にダルドは姿を消した。
少ししてからリユシオンが、

「ヴェルーナは、幼童の頃の記憶がないのか?」

(ああ。)

神が、聞いたことがこのあとあんなことになることは……。

ダルドの神話（前書き）

最近、新しい小説を書きたくてウズウズしてます・・・。

ダルドの神話

その昔、山の奥深くにある村があったそうだ。

その村に、とある青年が訪れた。

その青年は、銀の髪にとても深い瞳の青年だった。

村の人々は、戸惑った。

今まで一度も青年の様に村に来た人は一人もいないからだ。

それに、この村には宿がない。

あつたとしても、すぐ潰れるだろう。

村人が困っている中、村長が出てきて青年に言った。

「申し訳ないが、この村には宿がない。それに、泊められる程の
余裕がない。すまないが、帰ってくれ。」

そして、青年は言った。

「ならば、ここの農作物の育ち、質などをよくしましょう。」

村人は、疑った。

そんなことできる人が存在するわけない。

そんな中、村長が言った。

「本当に出来るのか？」

青年は答えた。

「はい。私は出来ます。出来なければ、殺して下さい。」

「いいだろう。一週間やる。その間にできなければ、お前を殺すからな。」

「有難うございます。」

そう言うと、青年は畑へ向かった。

村人が、そろそろとついて行く。

畑に着くと青年が、言った。

「いいですか。見ていてください。それと、私がやったことは誰にも言わないでください。」

そう言うと村人は、一斉に頷いた。

青年が、手を挙げる。

そして言った。

「植物よ、我の命を聞き受ける。」

青年が言うと、植物が見る見るうちに、伸びていった。

村人は、声を失った。

数秒すると、植物に実がなった。

そこで、成長が止まった。

「この植物は永遠に枯れない。永遠に実をつき続ける。」

青年は、そう言うとどこかに去って行った。

村人たちは、籠を持ってきて我先にと実を採っている。

と、ある少女が気が付いた。

青年が居ないことを。

少女は、アンネ。

アンネは、森の中に入った。

しばらく歩くと、湖が現れた。

湖の傍に青年が座っていた。

アンネが近づくこととする。

しかし、体が動かない。

少し遠いいが、アンネは叫ぶ。

「あの、作物を育ててくれてありがとうございますとうございまして。」

青年が、アンネの方を向く。

アンネは、礼をすると湖を去った。

翌日、青年の銅像が建てられたそうだ。

村人は、その青年は『ゾーエ・セオス』と名づけた。

意味は、生命の神。

ヴェルナーの過去（1）

ゾーエ・セオス。

ヴェルナーは、どこかで聞いたことがあるような気がした。しかし、思い出そうとすると頭痛するのだ。頭痛は酷くなっている。

ヴェルナーは、痛さのあまり頭を抑えた。

「ヴェルナー？どうした？頭が痛いのか？」

と、異変に気がついたリュシオンが言った。しかし、ヴェルナーに答えられる程の余裕は無い。ヴェルナーは、気を失った。

「あなた誰？」

（誰の声？）

鈴のような声が聞こえた。

ヴェルナーは、木や花が埋められている美しい庭を声の主を探すためにさまよう。

声の主は、腰ぐらいまである白金の髪にくりくりの睫毛に縁取ら

れた海と同じぐらい深い青い瞳の美少女だ。

少女に問われたのは、青年だ。

少女よりも深い青い瞳に、銀色の髪の毛のイケメンだ。

ヴェルーナは、青年をどこかで見たような気がした。

二人は、横にいるヴェルーナに気付いていない。

青年は、少女を無視して目を閉じた。

「ねえ、あなた誰？」

少女は、聞こえなかったのかな？と思いつながら聞いた。

だが、青年は聞こえなかった振りをする。

少女は、頬を膨らました。

少女は怒っているが、他の人からしてみれば、可愛らしい仕草だ。

「ねえ、答えてよ。」

少女は懲りずに問い続ける。

青年は、閉じた目を開いた。

そして、腰を掛けていた木から立ち上がる。

青年は、少女を見下ろした。

少女は自然と、見上げる形になった。

「人に名を聞くときは、自分の名前を言うのが先だ。」

「ごめんなさい。私は、リシエーネ・ベル・バルミ・アブ・ジロ
ンよ」

「俺は、ゾーエ・セオスだ。」

ヴェルナーは目を見開いた。

神話に出てきた神の名前と同じで、これは自分の記憶だと気付いたからだ。

ヴェルナーナの過去(2)

「ゾーエ・セオス？カオス村の青年と同じ名前ね。」

「カオス村の青年？誰だそいつ。」

ゾーエはムツとした。

「カオス村が毎年豊作で、冬でも作物が取れるのはそのゾーエ・セオスのお蔭なの。でも、彼が何者なのか、本当の名前は何と云うのか誰も知らないの。お父様が言うには、神のダルド様もたらしめてくれたと言っていたわ。」

(あいつら、言いやがったな。)

「あつ、でも、この話は、カオス村の村長から無理やり聞いたのだから、誰にも言わないでね。約束よ。」

しかし、ダルドは返事をせずうつむいていた。

(どうしてよ。)

と、考えながら。

「ねえ、聞いてる？ねえ、ゾーエ。」

いくらリシエーネが言っても、返事をしない。
すると、リシエーネは何を思ったか神の名を言った。

「ダルド？」

と。

すると、ゾーエは返事をした。

「何だ。」

リシエーネは、にこりと微笑んだ。その笑みは、何か企んでいる笑みだ。

ゾーエは顔を上げて、しまったという顔をした。

「やっぱり。貴方はカオス村を救った、ゾーエ・セオス。いいえ、この国、ジロン国に崇められている神、ダルドでしょう？」

「その通りだ。しかし、お前は賢いな。俺の正体に気が付いた奴はお前が初めてだ。何故分かった？」

リシエーネは、誰もが見惚れるであろう笑みを浮かべながら言った。

「私に、王になるべく育てられた私に、ゾーエ・セオスと名乗ったのが間違えね。すぐわかったわ。」

と、リシエーネが言い終わったのと同時に美しい声が聞えた。

「リシエーネ、私の可愛いリシエーネ。何処に居るの？」

「お母様。私はここに居ます。」

と、声のする方に向かって言った。

そして、ゾーエ…ダルドを向いて行った。

「あなたの事は誰にも言わないわ。その代わりに、毎日私とおしゃべりしてね。」

そう言い残して、さっき声のした方へ走って言った。

ヴェルーナは、ダルドをちらりと見てリシエーネの後を追った。

リシエーネの母親、否、自分の母親の顔を見るために。

「お母様！」

リシエーネは、金色の髪的女性に抱きついた。

「あら、リシエーネこんなところに居たの。探したのよ。」

と、言いながらリシエーネの方を向いた。

ヴェルーナは、彼女が振り向くのと同時にリシエーネに追いついた。

髪と同じ色のまつ毛に縁取られた眼は水色で、顔も整っておりリシエーネに似ている。

「ごめんなさい。次からは気をつけるわ。」

リシエーネが言うと、リシエーネの母は微笑んだ。

「さ、中に入ってお茶にしましょう。」

そう言うと、二人は王宮の中に入れて行った。

ヴェルナーも入ろうとすると、声が聞えた。

リュシオンの声だ。

ヴェルナーは目を瞑る。

再び目を開けたら、リュシオンの顔が目に入ってきた。

「良かった。」

と、リュシオンが呟いた。

これが恋ですか？（前書き）

今回は短いです。

「これが恋ですか？」

「良かった。」

そうリュシオンが呟く。

ヴェルーナは、彼の安心した顔を見て何故かドキリとした。

（何だこれ？）

「？ヴェルーナ？どうかしたか？」

（な、何でもない。）

と誤魔化す。

そして、リュシオンを見る。

怪我はほぼ完治しており、後は、傷が消えるのを待つだけだ。

この調子なら、国に帰れるであろう。

（その調子なら、国に帰ることができるな。）

とヴェルーナが言うと、リュシオンは悲しそうな顔をした。

その顔を見て、ヴェルーナは心が痛んだ。

(そんな顔をするな。また来ればいい。)

そんなヴェルーナに、リュシオンが言い返す。

「ここに来るには、国王の許可が必要だ。そんな、簡単じゃない。」

と。

ヴェルーナは考えた。

どうすれば、リュシオンを説得する事が出来るのだろうか。
しばらくして思いついた。

自分が定期的に、リュシオンに会いに行けばいいじゃないかと。

(リュシオン。私が定期的に会いに行くから、国に帰れ。)

「定期的？どれくらいだ？」

(二週間に一回ぐらいでどうだ。)

「いや、一週間に一回だ。」

(それでいいならそれでいいが…。)

すると、リュシオンはうれしそうに顔をした。

そして、ヴェルーナの心臓がまた、ドキリと波打つ。

(病気か?)

と呟くと、

「何？病気だと！何処が悪いんだ。」

と、心配された。

（嫌、何でもない。それより、本当に帰るな？）

「当たり前だ。約束したからな。」

と、言いリュシオンは微笑んだ。

（では用意をしよう。）

こうして、リュシオンとヴェルーナは用意を始めた。

（ところでこれは、恋というやつか？）

と、一人考えるヴェルーナであった。

リュシオンとの別れ

(これでいいな。)

と、蔦で作った袋の中を見て言う。

中には、一週間分の食料とウサギの皮で作った水の入った水筒、もし傷口が開いたり家ゲヲした場合の傷薬、野宿した時にかぶる虎の皮など、旅をするのに必要なもの一式が入っている。

ダントン国の最も近い村は、三日はかかる。

それにリュシオンは、傷を負っているでもしものことを考えて四日分食料を余分に入れた。

(明日の夜明けに出発しろ。早く出た方が早く着くからな。)

「ああ。今日で最後だな。」

(?何がだ?)

「お前と二人きりの時間だ。」

リュシオンが、真面目な顔をしながら言う。

(な、何を言っているんだ。一週間に一回会うだろう。)

「会ったとしても、護衛が付いてくるから無理だ。」

（何も二人きりじゃなくてもいいだろう。）

「……」

ヴェルーナがそう言うと、リュシオンは黙ってしまった。

（リュシオン？）

ヴェルーナが、リュシオンの顔を覗き込む。

そこにあつたリュシオンの瞳は、怒りに燃えていた。

「駄目だ！俺のヴェルーナを他の奴の目に触れさせるだなんて！」

と、突然怒り出した。

（リュ、リュシオン？何を言い出すんだ。別にいいじゃないか。）

そう言いながらヴェルーナは、内心ドキドキしていた。

「良くない！どうするんだ！ドラゴンハンターに狙われたら！」

（そ、そんなことが。心配するな。私は強い方だぞ？）

「そんな事とはなんだ！お前の色は珍しいんだぞ！」

（まあ、落ち着け。襲われたらそいつらを殺すから、安心しろ。）

「ほんとか？」

(ああ。)

そう言うと、リュシオンは仕方がないという顔で静まった。

日が昇り始め、辺りが明るくなる。

リュシオンは袋を担いで、森の中を歩いていた。

隣には、ヴェルーナが居る。

「これで最後か。」

(そうだな。)

箱庭の入り口に行くまで、会話はそれだけだった。

入口に着いたころには、日は姿をすべて現わしていた。

(気をつけるよ。それから、水は無駄遣いするな。)

「分かった。じゃ、一週間後。」

そう言うとリュシオンは、箱庭を出た。

ヴェルーナは、リュシオンの姿が消えるまで見送り続けた。

竜の姿で会うのが、これで最後だとは知らずに。

人間宣言(前書き)

短いです。

人間宣言

リュシオンを見送って、五時間ぐらいしたらダルドがやってきた。

「お前、本当に記憶がないのか。」

と、突然聞きながら。

（いや、ある。）

「はっ、どっちだよ。」

（思い出した。）

「そうか。なら、分かっていると思うが言っぞ。

お前は人間だ。それも王族の。元の姿に戻りたいか？」

（ああ。戻りたい。何処に行けばいい。）

「ジロン国の箱庭に最も近い山、バルミ山の頂上の洞窟にあいつ居る。名は分かるな？」

（もちろんだ。そこに行けばいいのだな？）

「そうだ。だが気をつける。あいつは交換条件を出してくる。そ

のつもりで居るよ。」

(分かった。行ってくる。)

そう言うと、ヴェルーナは翼を開き羽ばたいた。姿を元に戻し、リュシオンとの恋を叶えるために。

「そろそろ頃合いね。」

薄暗い洞窟の中に声が響く。
声が響くのと同時に、洞窟の中央にある水たまりが光る。
そこに、映像が映し出された。
姿を元に戻すために飛んでいる、ヴェルーナだ。

「条件はどうでしょうか。」

声の主がにやりと笑う。

「楽しみだわ。」

くすくすと笑い声が洞窟に響いた。

変化の神、バイオリニー

二日もヴェルナーは飛び続けた。

そして、目の前には大きな洞窟の入口がある。

洞窟の周りは、何の変哲もない森である。

(ここだな。)

洞窟の中に入ると、そこは薄暗かった。変わっていることと言えば、洞窟の真ん中にある大きな水溜りが和束に光っていることだ。

ヴェルナーが辺りを見回すと、笑い声が洞窟中に響いた。

そして、大きな水たまりの向こう側から、美女が出てきた。

紫色の髪に、真っ赤な瞳の美女だ。

服はシンプルなワンピースで、それが彼女を引き立てていた。

「やった来たのね。待ちくたびれたわ。」

そう言うと彼女は大きな欠伸をした。

「私はバイオリニー。変化の神よ。貴方の望みは元の姿に戻ることでしょう?」

(その通りだ。)

ヴェルーナがそう言うと、バイオリーニはくすりと笑った。

「前とは真逆な願いよね。あ、覚えてないか。」

（条件は何だ。）

バイオリーニが、笑みを深めながら言った。

「それをずっと考えてたのよ。そしたらね、いま思いついたわ。」

（何だ。）

「貴方を元の姿に戻してあげるわ。その代わりに、」

ヴェルーナは目を見開いた。

彼女が告げた条件は驚くべきものだった。

交換条件（前書き）

感想いただければ嬉しいです。

今回も短いです。すみません。

それではどうぞ。

交換条件

「貴方を元の姿に戻してあげるわ。その代わりに、髪の色は白。それ以外はそのまま。髪の色を戻すには、リュシオンに貴方の事が好きだと言わせること。それでいい？」

（分かった。）

「後、ダルドの事は忘れてもらうわ。」

（？何故だ？）

ヴェルーナが首をかしげながら言った。
バイオリーナは、くすくすと笑いながら、

「私にとって都合が悪いのよ。」

と言った。

ヴェルーナは、ますます首を傾げた。

（都合が悪い？）

「そう、都合が悪いの。でもあなたには関係ないわ。」

バイオリニーが微笑みながら言った。

この場に男がいたなら、その男は顔を真っ赤にするだろうと思うほど美しい笑みだった。

「さ、あなたと私が会うのはこれで最後。これからの人生、頑張って生きるのよ。そうそう、貴方は目覚めたらダントントン国の村に居るはずよ。それから貴方がなんとかしてね。それと、これをあげるわ。」

そう言っただバイオリニーが渡してきてくれたものは、青い美しい宝石のついた、白金色の指輪だった。

指輪には、一對の竜とその足元に、たくさんの動物が描かれていた。

「それは、ジロン国に伝わる秘宝よ。前に私のところに来たとき忘れていったものよ。それは、決して見せるんじゃないよ。髪の色が戻るまでね。」

すると、バイオリニーが先ほどの笑みとは比べ物にならないほどの美しい笑みを浮かべて言った。

「そうじゃないと面白くないもの。それじゃ、さようなら。」

バイオリニーが手を振った。

その後、目を開けてられないほどの光にヴェルーナは包まれた。

二人の夫婦（前書き）

どうも皇月です。

第二章突入です。

ではどうぞ。

二人の夫婦

目を開けたら、そこには木製の天井があった。

体の下には、ふわふわとしたものが敷いてありそれと同じものが体の上にもかかっている。とても気持ちがいい。

辺りを見回すと、壁も木製で、瓶がたくさん置かれた棚や花が飾られている棚がある。窓の外には花が綺麗に整えられていた。部屋の隅の方にあったドアが開いた。

「おや、目が覚めたのかい。」

と、入ってきた人が言った。

茶色の髪にそれと同じ色の瞳の女性だ。だが、決して美人ではない。どちらかというと、頼れるお母さんと言った感じだ。

「御譲ちゃん名前は？」

と、聞かれ戸惑ってしまった。

ヴェルーナでもいいが、髪の色が戻った時のことを考えて、

「リシエーネ。」

と、答えた。

「そうかい。私は、ベレーデ・カーン。調子はどうだい？」

「大丈夫です。ところで此処は何処ですか？」

「ここはダンカン国最北の村、ヘリシオ村だよ。まあ、箱庭にも近いけど。ちなみにここは私の家だよ。」

「ここに私が来て何日になりますか？」

「えーと、ちょうど一月になるね。ずっと寝てるもんだから心配したよ。」

「そうですか。」

リシエーネが言い終わると同時に、リシエーネのお腹が鳴った。

「ああ、ちょっと待ってておくれ。」

そう言つと、ベレーデはドアから出て行った。
少しすると、ベレーデが戻ってきた。手に何か持っている。
それをベッドの横にある、テーブルに置いた。

「さ、お食べ。」

そう言つと、リシエーネが起き上がるのを手伝ってくれた。
テーブルの上には、湯気の立っているシチューにパン、サラダと
フルーツが置いてあった。

リシエーネはそれをぺろりと平らげた。
それのおかげで、リシエーネのお腹は満たされた。

「私の服じゃ大きいようだね。」

ベレーデは、リシエーネの身なりをしげしげと見ながら言った。リシエーネは、ぶかぶかの服を着ていた。

「それに下着も買わなくちゃね。ついておいで。」

リシエーネは、慌ててベレーデの後について行った。

リシエーネが寝ていた部屋の二つ隣の部屋の中に入った。

その部屋は綺麗に整われており、二つのベッドとクローゼットとタンスがあった。

ベレーデはタンスの前に行くと、二段目の引き出しを開け、ワンピースを取り出した。

「少し大きいが、我慢しておくれ。」

ベレーデはすまなそうに笑った。

リシエーネは頷くと、ベレーデからワンピースを受け取り着替えた。

「さ、行こうか。」

リシエーネは、ベレーデと共に家を出た。

家を出ると、そこには家が並んでいた。

しばらく歩くと、人が賑わう所に出た。

少し歩くと服屋に着いた。

中には、たくさんのワンピースとドレスが並んでいる。

ベレーデは真っ直ぐレジに言った。

そこに、四十代後半のダンディな人が居た。

「アイアン、あの子の目が覚めたよ。」

ベレーデが言うと、アイアンはリシエーネを見た。

「リシエーネ、私の旦那、アイアンよ。アイアン、リシエーネよ。」

「これは美人さんだな。はじめまして、リシエーネ。アイアンと呼んでくれ。」

「はじめまして、アイアンさん。」

「アイアン、この子にぴったりワンピースを二十着おくれ。」

ベレーデがそいって、アイアンは店の奥に消えた。

「に、二十着？」

「ん？そつだよ。しばらく家に居ていいからね。」

「でも…。」

「いいんだよ。」

「有難うございませす。」

リシエーネがそつ言うと、ベレーデはうれしそうに微笑んだ。

「こんなんでどうかね。」

そう言いながら、アイアンが店の奥から出てきた。
その手には二十着の色とりどりのワンピースがあった。

「それでいいよ。」

アイアンはそれを丁寧に畳んで、袋に入れてくれた。

店を出ると、次は下着を買いに行った。その次に、櫛や髪留めなど、身の回りの者すべてを買いそろえた。

こうして、リシエーネは人の良さそうな二人の夫婦にお世話になるのであった。

ベレーデとアイアンの子供

「入ってもいいかい？」

と、ノックと共に聞えてきた。
二人にお世話になって、もう一カ月が過ぎた。
仕事もなかなか見つからない。

「どうぞ。」

リシエーネがそう言うと、ドアが開きベレーデが入ってきた。

「どうかした？」

ベレーデとアイアンに、敬語は使うなと言われたため、敬語は使っていない。

「三日後にね、息子が帰ってくるの。」

リシエーネは首を傾げた。

ベレーデとアイアンの息子はリュシオン付きの騎士だ。休暇の時期でもないのに戻ってくるのは変だ。

「この時期に？」

「リュシオン殿下が、箱庭に行くついでに前に来た時に厚くもてなしてもらったお礼の為だよ。」

リシエーネは益々首を傾げた。

「前にも来たの？」

「ああ。戦場から帰ってきたからね。あれは奇跡だよ。」

「そうなんですか。早く息子さんに会えるといいですね。」

「でもあの子には手を焼いてるよ。リシエーネも気をつけなさいよ。」

リシエーネはまた首を傾げた。

「何に？」

リシエーネがベレーデに聞いてもベレーデは苦笑いをするだけで教えてはくれなかった。

リシエーネは、庭を眺めていた。

綺麗に並べられた花々はとても美しく、箱庭を思い出させた。

フーと、ため息を吐くとドアがノックされた。

ベレーデかなと思いつながら、返事をする。

ドアが開く音がしてドアの方を向くと、そこには知らない男の人が立っていた。

「どちら様？」

「君がリシエーネか。」

そして、リシエーネの顔や体をしげしげと見つめると、

「胸は薄いが、綺麗じゃないか。」

と言った。

胸が薄いとは失礼じゃないか。それに、胸が薄いのはワンピースを着るために晒を巻いているだけだと言おうとした時、彼が突然自己紹介をした。

「初めまして、リシエーネ。俺はリュシオン殿下専属の騎士、カイン・カーン。」

そう言うと、リシエーネの手を取り指先に口づけを落とした。

それと同時に、ベレーデが部屋に入ってきた。

「これカイル、その手を離しなさい。」

ベレーデはそう言うなり、カインの首根っこをつかんだ。

「すまないね、リシエーネ。不甲斐ない息子だがよろしく頼むよ。」

「は、はい…。」

リシエーネが返事をする、ベレーデがカインを部屋から連れ出した。リシエーネもそれについて行く。

リシエーネの部屋や、ベレーデとアイアンの寝室などある二階から降り一階のリビングに着くと、カインは正座をさせられ説教をされた。そして誓った。

「あ、明日、リュシオン殿下を連れてきますから。」

と。

リシエーネの胸が高鳴った。明日、リュシオンに会えるのだ。

リュシオンと対面（1）（前書き）

どうも皇月です。

今回は、リシエーネとリュシオンが対面します。

ではどうぞ。

リュシオンと対面（1）

「本当かい？」

「や、約束します。」

カインは、今まで床を見つめていたアイアンと同じ緑色の瞳をベレーデに向けた。

「破るんじゃないよ。」

ベレーデはそう言うと、床に正座している息子の髪をなでる。カインの髪は、ベレーデに似た栗色だ。

「ほら立ちな。」

カインをベレーデは立たせた。そしてリシエーネに言った。

「いいかい、リシエーネ。こいつに必要以上に近づくんじゃないよ。」

「母さん、それは無いじゃないか。」

「お黙り。」

ベレーデの一喝でカインは大人しくなった。

「いいかい、リシエーネ。」

「はい！」

と、リシエーネは元気良く頷いた。

椅子に座り、静かに紅茶を飲んでいたアイアンがクスクスと笑った。

朝食を食べ終わり、部屋で読書をしているとまたドアがノックされた。

このノックの仕方はカインだ。

リシエーネが返事をする間もなく、カインが入ってきた。

「リシエーネちゃん。」

と、言いながら。

そして抱きついてきた。

「き、気持ち悪い！」

リシエーネはそう言いながらカインを突き飛ばした。
そして胸を隠す。

「ドサクサに紛れて触らないでください。」

「いいじゃないか。」

ニヤニヤしながらカインが言う。

「こっつ、こっつに來ないで！」

リシエーネは部屋から飛び出した。

階段を駆け下り、アイアンとベレーデが居るリビングに駆け込んだ。

「ベレーデ、助けて！」

リシエーネは、椅子に座っているベレーデに抱きついた。

「こら！カイン、リュシオン殿下の前だぞ、大人しくしていなさい。」

カインは大人しくなった。

が、リシエーネはそんなことより、リュシオンが居ることに驚いた。

ベレーデの向かいの椅子に、リュシオンが優雅に座っている。

リシエーネは、ベレーデから慌ててはなれた。

「リュシオン殿下、すまないね。この子は、リシエー」

「ヴェルーナ？」

そう言うと、リュシオンが抱きついてきた。

「え？」

慌てて離れようとしたが、力は強まる一方だ。

「リュシオン殿下。私はリシエーネです。ヴェルーナとやらでは
ありません。」

リシエーネから離れると、リュシオンは言った。

「どこからどう見ても、ヴェルーナだ。」

その言葉に、リシエーネも目を見開いた。

リュシオンと対面(2) (前書き)

どうも、皇月です。

今日から冬休みなんですけど、更新できないかもしれません。

理由は、遊びたいからです。

ご了承ください。

ではさよう。

リュシオンと対面(2)

「何を言っているんだい、殿下。ヴェルーナは竜だろう。」

カインが呆れたように言った。

「何を言う。この俺が間違えると思っているのか。」

リュシオンの瞳に、怒りの炎が灯る。

そして、リシエーネを見ていった。

「今までどこに居たんだ！心配したんだぞ！」

「リュシオン殿下、私は人間です。竜ではありません。」

リシエーネが言うと、リュシオンは更に怒った。

「お前はヴェルーナだ。」

「リュシオン殿下、およろしよ。リシエーネが困っているだろう。」

ベレーデが言うと、リュシオンは渋々リシエーネから離れた。

「リシエーネが竜だっという証拠はあるのかい？」

「……。」

リュシオンは、何か言おうとしたが口を閉じた。

「ないんだろう?。」

「ああ。すまない。」

リュシオンは、済まなそうにリシエーネに謝った。

「そう思うなら、私に良い仕事を紹介してくれないですか?。」

「分かった。」

リシエーネはくすりと笑った。

「殿下、時間です。」

カインが言うと、リュシオンは言った。

「また明日来る。その時に仕事を紹介してやる。」

そう言うと、外へ通じているドアから出て行った。

仕事は何ですか？

「これが仕事だ。」

リュシオンが、紙を差し出してきた。

そこに書いているのは、メイドの心得が書いている紙だった。

「メイド？」

「そうだ。俺の専属のな。」

一緒に横に座っていたベレーデが目を見開きながら言った。

「何だって！」

「悪いのか？」

リュシオンの威圧的な空気に、ベレーデは口を噤んだ。

「ありがとうございます。何時出発するんですか？」

「明日の夜明けだ。準備しろ。」

「はい。」

リシエーネは微笑みながら言った。

「ベレーデ、今までありがとう。何時か恩返しに来るわ。アイアンにも伝えておいて。」

「リシエーネ…。」

ベレーデは、リシエーネに抱きついた。

「辛くなったらいつでもおいで。リュシオン殿下と、カインには気をつけるんだよ。」

「はい。」

太陽が、徐々に姿を現し始めた。

「行くぞ。」

リュシオンが言うと、馬が走り出した。

リュシオンは、カインとリゼとフィギという騎士だけ連れてきていた。

リシエーネは無理やり、カインの馬にのせられた。

「喋らないでね。舌を噛むかもしれないから。」

カインが微笑みながら言った。町の女の子たちが黄色い声を上げ
そうだ。

リシェーネはこくりと頷いた。

馬は、物凄いスピードだった。

二つの町を通って、あっと言う間に王都に着いた。

王都の門が開くと、そこには沢山の人で溢れかえっていた。

皆、リュシオンを見つけると頭を下げた。

十分ほど行くと、大きな城が見えてきた。

城の門が開くと、メイドや執事が礼をしていた。

「お帰りなさいませ、リュシオン殿下。」

そのメイドや執事たちが声をそろえて言った。

リュシオンが、その中の一人のメイドに近づいた。

そのメイドは、他のメイドの水色のワンピースとは違う、青いワ
ンピースを着ていた。

そのメイドの近くに行くと、カインが馬から降りしてくれた。

「メリッサ、このリシェーネの教育を頼んだぞ。」

「かしこまりました。」

メリッサは、頭をまた下げた。

少しして頭をあげると言った。

「リシェーネさん、こちらに来て下さい。」

メリッサについて行くと、メイド用の出入り口があった。
リシェーネは、深く息を吸いこんでドアの中に入った。

リュシオン付きのメイド

「これでいいわ。」

メリッサが、リシエーネの頭に水色の帽子をかぶせてくれた。それは、お団子結びしていた髪にピッタリとはまった。

「あの、白い帽子じゃないんですか？」

他のメイドは、白い帽子だからだ。

リシエーネが問うと、メリッサは笑った。

「リュシオン殿下付きのメイドは水色の帽子をつけるのよ。」

「そうなんですか。」

リシエーネは頷きながら言った。

「今日からあなたは、リュシオン殿下付きのメイドよ。」

一週間、ミツチリとメリッサにメイドになる為の作法などを学んだ。

普通では、一カ月かかるそうだ。

「さ、リュシオン殿下に挨拶に行きなさい。」

メリッサに押されて、メイドの更衣室から出る。

十分ほど歩いたところにあるリュシオンの部屋のドアを叩く。

「入れ。」

と、リュシオンの声の中から聞こえてきた。

ドアを開けると、リュシオンが書類と向き合っていた。

「リシエーネ、教育は終わったのか？」

「はい。これからお世話になります。」

リシエーネはにっこりほほ笑んだ。

リュシオンは女嫌い

「他のメイドは付けないんですか？」

「他のメイド？」

リシエーネが聞くと、リュシオンは書類に判子を押ししていた手を止めた。

カインが慌てて言った。

「リシエーネ、こっち来て。」

カインについて廊下に出ると、カインが言った。

「あのね、リュシオンは女嫌いなんだ。」

「女嫌い？」

「そう。」

「じゃあ、私は？」

「さあ。リュシオンに聞いてみれば？」

カインがニヤニヤしながら言った。
それにしても、リュシオンが女嫌いだとは初耳だ。

(じゃあ、何で私を?)

リュシオンの書斎に入って、リュシオンを問いただす。

「ねえ、何で女嫌いなのに私をリュシオンのメイドにしたの?」

リュシオンが敬語はいいと言ったので、碎けて話す。

「それは……」

「それは何?まさか私を竜だと思ってるの?」

リシエーネは、微笑みながら聞く。だが、その目は決して笑っていない。

「うっ。」

「酷い。私を人間だと思っていないだなんて。」

「怒れないでくれ。ただ、ヴェルーナと似ているから……。」

「だから何!??」

「だからその……。」

リュシオンの隣に居るカインが、クツクツと笑っている

リシエーネは、リュシオンの机を叩いた。

「ハッキリしてよ！」

「リシエーネ、その胸をどうにかしてくれないか？」

リュシオンの目の前では、リシエーネの大きな胸が揺れていた。

「もういい。」

リシエーネは、書斎を飛びだした。

リュシオンは、横で腹を抱えて笑っているカインを睨んだ。

「リシエーネに何を言ったんだ。」

「何も。ただ、女嫌いだと言っただけだ。後は殿下が悪い。」

カインは、必死に笑いを堪えている。

リュシオンは大きくため息を吐いた。

リユシオンはカルシウム不足（前書き）

どうも皇月です。

あれ？最近リユシオンについて書いているような…。

まあ、いつか。

ではどうぞ。

リュシオンはカルシウム不足

書斎が、重い空気に包まれている。

カインは、リュシオンに八つ当たりされている執事を気の毒に思った。

「も、申し訳ございません。」

執事は何度も頭を下げている。

執事が誤って落としてしまったティーカップの中の紅茶が、絨毯に染みを作る。

「ただ今、新しい物をお持ちいたします。」

「いや、いい。」

と、リュシオンが冷たく言い放つ。

（完全に八つ当たりじゃないか。自分が悪いのに。）

カインは思わずそう思った。

こうなったのは、五時間前……

「リシエーネ、お茶を入れてくれ。」

リュシオンが言う。

だが、リシエーネはそっぽを向く。

「リシエーネ？お茶を入れてくれ。」

リュシオンが更に言う。

それでもリシエーネは、紅茶を入れようとしなない。

「リシエーネ。リュシオン殿下に紅茶を入れてくれないかな？」

「かしこまりました。」

カインが言うと、リシエーネは紅茶を入れるために部屋の外に出た。

「どづいづことだ？」

リュシオンが、棘のある声で言う。

そしてカインを睨んだ。

「さあ。あれのせいじゃない？」

リュシオンは昨日の事を思い出した。
隣でカインが、腹を抱えて笑っている。

「あれは、傑作だね。」

カインが笑いが収まってから言った。

リュシオンはカインを睨んだ。

それはカインが、冷や汗を流して身震いしてしまう程、冷ややか
だった。

そして今に至る。

執事が出て行ったドアから、リシェーネが入ってきた。

「ねえ、さっきの人に何て言ったの？泣いてたわよ？」

リシェーネは、昨日の事も忘れてリュシオンに話しかけてきた。

「なにも。」

リュシオンが不機嫌そうに答える。

「謝ってくれたら許してあげるのに……。」

その声に、リシエーネは思わずつぶやいた。

「本当か？」

リシエーネはそっぽを向く。

「昨日は、すまなかった。」

リュシオンは、素直に謝った。

リシエーネは、満足そうに微笑んだ。

「ふふ。最初から謝っていればいいのに。」

リシエーネがそう言うと、リュシオンの目が、嬉しそうに輝いた。それを見たカインが思わず吹き出すと、リュシオンはそれを睨んだ。

恋に目覚めた(前書き)

どうも皇月です。

今回はリユシオンのお話?です。

ではどういぞ。

恋に目覚めた

リシエーネを、壁に押さえつけた。

「え？」

リシエーネの目が見開かれる。

リュシオンは、リシエーネの可愛らしい唇に、自分の唇を重ねた。
リシエーネの、青い瞳が更に開かれる。

「何す…ん。」

喋ろうとして開かれた口に、リュシオンは下を入れた。
リシエーネが、崩れそうになったので左手で支える。

「んん…。」

リュシオンはガバリと起きた。

「何だ今の…。」

驚きのあまり、呆然とする。

心臓が高鳴っており、体が火照っている。

「カイン。」

扉の向こうに居るカインを呼ぶ。

「お呼びでしょうか。リュシオン殿下。」

その言葉は、嫌味が込められている。

だが、今のリュシオンを返せるほどの余裕はない。

「殿下？どうかしました？」

カインが、リュシオンの顔を覗き込む。

そして、リュシオンはさつき見た夢の事を話した。

「あー、それは、恋ですね。」

「こゝ、い？」

「そうです。殿下は、リシェーネを見ただけで心臓はドキドキしますか？」

「ああ。する。」

リュシオンは、何故分かったという顔をした。

「それは恋です。」

「俺が、リシエーネに？」

「そうです。」

リュシオンは、呆然とした。

(そうなのか?)

リュシオンは自分に聞いた。

「初恋ですね。」

カインが、ニヤニヤしながら言った。

陛下と対面（前書き）

どうも、皇月です。

今年、最後の更新になるかもしれません。

ではどうぞ。

陛下と対面

「はあ~~~~~。」

盛大な溜息が、書斎に響いた。

「どうかした？」

「はあ~~~~~。」

と、リシエーネが聞くと更に大きめため息をついた。その隣に居るカインが、ニヤニヤしている。

「女嫌いの殿下がね。」

「黙ってる。」

リュシオンがそう言うと、カインは深刻な顔になった。リシエーネは、首を傾げた。

「これはライバルだ…。」

と、カインが呟いた。

「それなら俺の勝ちだな。」

それに対してリュシオンが、答える。

リシエーネはますます首を傾げた。

「何の話？」

「それはね、リシエー」

「何でもない。ただの、ゲームの話だ。」

何か言おうとしたカインを、リュシオンがさえぎる。

「リュシオン殿下は、恋をしたんだよ。」

カインが言うと、リュシオンは顔を真っ赤にした。

「なっ。」

「そうなの？お相手は誰？」

「それはね、」

「だから黙ってる。」

リシエーネとカインの会話を、リュシオンが邪魔をする。

「いいじゃない。誰にも言わないから。」

「駄目だ。」

「あのね、」

「カインは黙ってる。」

「酷いじゃないか、殿下。」

「ゴホン。」

と、咳ばらいが聞えた。

三人は、一斉に咳ばらいがした方を見る。

その人物を見て、リュシオンは立ちあがって礼をして、カインは膝について礼をした。

「おや。」

と、驚きのあまり動けないでいるリシエーネを、その人物はしげしげと見つめた。

そして、リシエーネの顎をつかみ、自分の方を向けて言った。

「儂の側室にならないか。」

「父上。」

と、リュシオンが止めに入る。

「冗談だよ。お前がメイドを雇ったと聞いて、見に来ただけだ。いい女を捕まえたな。さすが儂の息子だ。」

「父上。」

「安心しろ。手は出さないよ。」

男は：ダントン国王、シュベルツ・ル・アベルト＝ダントンは
にこりと微笑んだ。

大人の魅力を放つシュベルツに、リシエーネは頬を染めた。
それを見ていたリュシオンは、シュベルツを睨んだ。

結婚の話（前書き）

どうも皇月です。

遅くなってすみません。

それではどうぞ。

結婚の話

「それで、何の用ですか。」

リュシオンが、シュベルツに睨みを利かせながら問う。
シュベルツが、リシエーネをちらりと見てから言った。

「結婚の話だ。」

シュベルツは、ソファーに座りながら言った。
リュシオンが、リシエーネに目配せをした。

「失礼しました。」

そう言うと、リシエーネは部屋を出て行った。

「俺は結婚なんかしませんよ。」

リュシオンが、シュベルツの向かいのソファーに座りながら言う。

「そんなにあの子がいいのか。」

「なっ」

シュベルツがそう言うと、リュシオンは顔を真っ赤にした。

「凶星か。」

顔を真っ赤にしているリュシオンの横で、カインが笑いを堪えて
いる。

シュベルツは、そんな息子の姿を見て微笑んだ。

「彼女を娶るなら、ジロン国の姫と結婚してもらおう。」

「わ、分かった。」

リュシオンは、リシェーネの為ならとそれを承諾した。

「あなた、リシェーネが帰ってこないと。」

「分かっているよ。シュベルツはそろそろリシェーネと合わせて
くれと言ってくるころだ。」

「どうするんですか？」

金色の美女が、心配そうに青い瞳を揺らした。その瞳には、白金の髪 of 男性が写っている。

「ウィリア、大丈夫だよ。」

白金の髪 of 男性が、美女に言う。

「だけど、」

「大丈夫だよ。リシェーネは、今月中には戻ってくるよ。」

「ですがもう、七年間も戻ってきていないのよ。」

ウィリアは、美しい顔に一筋の涙を流した。

「大丈夫だよ、ウィリア。いざとなったら、エスクードに女装させるよ。」

「アルフォン。」

ウィリアが、咎めるように言った。

「あの子は男の子よ。それにもう二十歳よ。」

「冗談だよ。」

二人の笑い声が、暗い寝室に響き渡った。

リュシオンの気持ち

リシエーネは、シュベルツと会ってから一週間後、リュシオンに呼び出された。

書斎の中には、カインは居らずリュシオンとリシエーネだけだ。

「どうかした？」

リシエーネがリュシオンに聞くと、リュシオンは意を決したようにリシエーネを見据えた。

「あんな、」

「うん。」

「お前の事が好きだ。」

「え？」

リュシオンに問うと、顔を真っ赤にしながらまた言った。

「だから、お前の事が好きだ。愛している。」

そう言われて、リシェーネの胸が高鳴った。
同時に、嬉しさに満たされた。

「私も、」

私も、好き。

そう言おうとしたら、突然目の前が真っ白になった。
そして、昔の記憶が全て思い出す事が出来た。

おめでとう。これでああなたは、リシェーネ・ベル・バルミ・
アブ・ジロンに戻るわよ。

と、頭の中に声が響いた。

それは、リシェーネに試練を与えたバイオリーンの優しい声だっ
た。

「リシェーネ？」

リュシオンが問うと、リシェーネは突然倒れた。

「！」

リュシオンは慌ててリシエーネの元に駆け寄り、支えた。

「カイン！」

ドアの外に待機しているカインを、慌てて呼ぶ。その声色を察して、カインも慌てて入ってきた。

「殿下、どうかなさいましたか。」

「カイン、医者を呼べ！早く！」

「はっ。」

リュシオンが命じると、カインは走って書斎を出て行った。

リュシオンは、リシエーネが息をしているか確かめた。

リシエーネが息をしているのを確認して、安堵の息を吐いた。

リシエーネの正体

「貧血でしょうね。」

リシエーネを診た医師が、そう言った。

「そうか。」

リュシオンは、本日二度目の安堵の息を吐いた。

「ですが、」

「何だ。」

「髪の色が…。」

「髪？」

リュシオンは首を傾げた。

「あら、リュシオン殿下。」

リュシオンが首を傾げたのと同時に、声が聞えてきた。

リュシオンが声のする方を見ると、そこには、ジロン国王妃ウイリア・ベル・バルミ・アブ・ジロンが、居た。その姿を見て、医師は頭を深々と下げた。

「ウイリア妃、何故ここに？」

リュシオンが問うと、ウイリアはくすりと笑った。

「あんなに大声を出していたのに気づかないとでも？」

「申し訳ございません。」

「今日はね、シュベルツに会いに来たの。」

ウイリアとシュベルツ、アルフォンとリュシオンの母でありダントン国王妃のメアリアは、幼馴染だ。

「父上に？」

「結婚の話をしにね。それより殿下はどうなさったの？」

「それは、」

リュシオンが説明しようとした時、医務室の中からカインが勢いよく出てきた。

「殿下、目が覚めました。」

カインはそう言って、リュシオンを見た後その前に居るウイリアを見て礼をした。

「し、失礼しました。」

「いいのよ。それより誰が寝ているの？」

「どうぞ入ってみてください。」

と、ウィリアの問いに医師が答えた。

「お言葉に甘えて。」

ウィリアが医務室に入ると、叫んだ。

「リシエーネ!!!」

そして、リシエーネも叫んだ。

「母上!!!」

そして、周りに居るものは目を見開いた。

両親と再開

「母上ー!」

リシエーネはそう叫び、ベッドから出てウィリアに抱きついた。

「ああ、リシエーネ。今までどこに居たの。心配したのよ。」

と、ウィリアが言いながらリシエーネにきつく抱きついた。

「どういうことだ?」

リュシオンが疑問を口にした。

その疑問にカインと医師の二人が頷いた。

その疑問に、リシエーネがウィリアから離れて言った。

「申し遅れました。私はジロン国第一王女、リシエーネ・ベル・バルミ・アブ・ジロンと申します。」

リュシオン、カイン、医師の三人は目を見開いた。

「だが、髪の色が…。」

「それはバイオリーンに掛けられた呪いのせいです。」

「でもよかったわ。これでシュベルツに……あっ！」

ウィリアはそう言うと、部屋から飛び出した。

「母上？」

リシエーネは、首を傾げた後ウィリアの後を追った。

「リシエーネ！」

その後を、リュシオンが追う。

「殿下！」

さらにその後を、カインが追う。

「はあ~~~~~」

後に残った医師は、大きなため息を吐いた。

「何の用だ？」

シュベルツが、アルフォンに問う。

「その、」

アルフォンが、答えようとした時ウィリアがすごい勢いで部屋に入ってきた。

「アルフォン！リシエーネが帰ってきたわ。」

「ほ、本当かい！？」

アルフォンの顔が、嬉しそうに輝いた。

「帰ってきた？」

その言葉にシュベルツは首を傾げた。

「父上！！」

叫び声と共に、リシエーネがアルフォンに抱きついた。

「リシエーネ。」

シュベルツはリシエーネの顔を見て、首を傾げた。

「リュシオンのメイドではないか？」

シュベルツは更に首を傾げた。

リュシオンは婚約者（前書き）

遅くなってごめんなさい。

ではどうぞ。

リュシオンは婚約者

「シュベルツ、この子がリシエーネだ。」

アルフォンが自慢げに、リシエーネを紹介した。

「リシエーネが……。」

シュベルツと一緒にリシエーネの紹介を聞いていたリュシオンは、愕然とした。

自分が好きになったのはリシエーネだ。

そのリシエーネは、リュシオンの婚約者だったのだ。

「あの、殿下、先ほどのお返事の事ですが……。」

そんなリュシオンにリシエーネは、言った。

リュシオンは慌てて言った。

「その話をこんな所でするな。」

「あら、それなら私たちは退出しましょう。」

ウィリアがそう提案すると、シュベルツとアルフォンの二人は頷きウィリアの後に付いて部屋を後にした。

だが、三人はドアの前で聞き耳を立てていた。

「その、私も好きです。」

ドアの前の三人は、ニヤニヤしている。

そして、自分の子供を祝うため、勢い良く部屋に入った。

「良かったなリュシオン。」

「良くやったわ、リシエーネ。」

リシエーネとリュシオンは顔を真っ赤にした。

シュベルツとアルフォン、ウィリアとメアリアは結婚の話をして
いた。

「結婚はいつにする?。」

「一週間後でどうかしら?。」

メアリアが提案すると、他の三人は賛成した。

「ドレスはどうする？」

「トールレスにまかせましょ。」

「そうね。」

トールレスとは、ダントン国で一番腕のいいお針子だ。

「一週間後が楽しみだな。」

「そうだな。」

アルフォンとシュベルツは、楽しげに話すウィリアとメアリアを見てそう言った。

結婚式（前書き）

遅くなってすみません。
今回は短いです。

結婚式

リシエーネは落ち着きなく部屋を行ったり来たりしていた。リシエーネが着ているのは、シフォンを惜しみなく使った純白のドレスだ。ベールはマットを使っている。

「リシエーネ様、用意が出来ました。」

ノックの後にメリッサの声が聞えてきた。

「今行くわ。」

リシエーネはそう言うと、部屋から出た。

礼をしてから歩き出したメリッサに付いて行き、一つのドアの前で止まる。

ドアを開けると、バルコニーのある部屋が広がった。

バルコニーまでの道には、紅いカーペットが敷いてある。

リシエーネの心臓は高鳴り、落ち着かなくなつた。

リュシオンがリシエーネの傍に来て、手を差し出す。

リシエーネがリュシオンの顔を見上げると、リュシオンは微笑んだ。

リシエーネは微笑み返すとその手に自分の手を乗せた。そして、ゆつくりとバルコニーに向かってカーペットを歩く。バルコニーに近づくとつれ、外から聞こえてくる声が大きくなった。

それにつれ、リシエーネの心臓も高鳴る。

バルコニーに付くと、城の前に集まった人々の歓声がより一層大きくなった。

部屋から神父が出てきて、結婚式が始まった。

歓声はおさまり、皆一言も聞き逃すまいと耳を傾けている。リシエーネは緊張のあまり、神父の声が全く聞えなかった。神父が何か言い終わると、みんな一斉にリシエーネを見た。

「え？」

「誓うかどうか聞いているんだ。」

と、戸惑うリシエーネにリュシオンが耳打ちをしてくれた。

「誓います。」

リュシオンも同じように問われ、

「誓います。」

と答えた。

「では、誓いのキスを。」

神父は微笑みながら言った。

リシエーネはリュシオンの方を向かせられ、唇を重ねた。

それと同時に、歓声が上がった。

それは先ほどよりも大きく、「おめでとう」「という声まで聞こえてきた。

リシエーネとリュシオンは微笑みあって、愛を誓った。

第一子 アルバート

バタバタと騒がしく足音が聞える。

「もう少しです、リシエーネ様。」

メイドの一人がリシエーネに呼びかける。

「ん、は、はあ、はあ」

リシエーネは、息が上がりお腹の痛みに耐えている。

「オギャー——」

大きな泣き声が部屋に響いた。

足音は更に騒がしくなり、同時にため息も聞こえた。

メイドが、寝てしまった赤ん坊をリシエーネに渡した。

「元気な男の子です。」

赤ん坊は、リュシオンと同じ金の髪だ。

「おめでと〜うございます。」

メイドたちが微笑みながら言った。
それを待っていたかのように、部屋の中にリュシオンが入ってきた。

リュシオンは、リシエーネが抱いている赤ん坊を見て安心し、微笑んだ。

「良く頑張ったな。」

リュシオンにそう言われ、リシエーネも微笑んだ。
その二人を見てメイドたちは、更に笑みを深めた。
リシエーネはリュシオンに赤ん坊を渡した。

「この子の名前は、アルバートだ。」

リュシオンがそう言うと、リシエーネは言った。

「アルバート…いい名前ですね。」

赤ん坊、アルバートは大きな欠伸をした。

「アルバート、アギーをいじめるのはやめなさい。」

リシエーネはアルバートに言った。
アギーとは、リシエーネ付きのメイドだ。

「リシエーネ様、助けてください！」

アギーは、赤い髪を揺らしながらアルバートから逃げている。
アルバートはリユシオン譲りの緑色の瞳を輝かせながら、アギーを追いかけている。

「母上に助けを求めるとは、お前もまだまだだな。」

アルバートはアギーを追いかけるのをやめ、そう言った。

「アルバート。」

リシエーネがきつく言うと、
アルバートは素直に謝った。

「申し訳ございません。」

だがそれはリシエーネに謝っただけで、アギーには謝ってはいない。

アギーは大きなため息をついた。

「アルバート様、もう七歳なのですからいい加減やめて下さいませんか？」

「ヤダ」

アルバートは再びアギーを追いかけた。
その手には、鼠がいる。

「わぁーーーーー」

二回目の妊娠（前書き）

どうも皇月です。

遅くなってすみません。

風邪を引いてしまって。

皆さんも風邪をひかないよう、気をつけてください。

それと、紅蓮の竜という小説を新しく書いてみました。
呼んで頂けると嬉しいです。

それではどうぞ。

二回目の妊娠

リシエーネとリュシオン、アルバートはリシエーネの部屋でお茶を飲んでいた。

三人が囲んで座っているテーブルには、子供が好みそうな茶菓子が並んでいる。

その時、リシエーネは子供の怖さを知った。

「父上、母上と子どもを作ってください。」

その言葉にリシエーネは噎せて咳き込み、リュシオンは面白そうな顔をした。

「そろそろ妹が欲しいのです。」

リュシオンは目を細めた。

「ちゃんと仲良くするか？」

「はい…。」

リュシオンの問いにアルバートは元気よく答えた。
リュシオンはアルバートに微笑みかけてから、外に待機している
カインに声をかけた。

「カイン、残りの仕事は明日やる。下がっている。」

「はっ。」

ドアの前から気配がなくなってから、リュシオンはリシエーネを
抱きかかえた。

アルバートは瞳を爛々と輝かせ、二人を見ている。

「え、ちょ」

リシエーネが抵抗するが、それは無駄に終わった。

「アルバート、部屋に戻りなさい。」

リュシオンは、ベッドに向かいながらそう言った。
アルバートは大人しく部屋から出た。

「ほ、本気？」

「当たり前だろう。」

「何時生まれるの？」

アルバートがリシエーネのお腹をさすりながら言う。
リシエーネのお腹は膨れ上がり、妊娠している事が分かる。

「はー、二週間後よ。」

「楽しみだな。」

リシエーネは苦笑いをした。
その横に居たリュシオンは、微笑み、リシエーネの首筋に口づけをした。

「ひゃん」

そんな二人をアルバートはニヤニヤしながら見ていた。

「楽しみだな。」

リュシオンはリシエーネの耳元でささやき、笑みを深めた。

「はーーーー」

リシエーネは再び溜息をついた。

第二子 ヴィオレーヌ

雲ひとつない青い空に、太陽が輝いている。

「ヴィオ、何処に居るんだい？」

様々な花が並ぶ庭を、アルバートが歩く。

アルバートは、まだ幼さが残っているがリュシオンにますます似てきた。

アルバートはあたりをキョロキョロ見回し、何かを探している。少しすると、花の向こうに何かが動いていた。

アルバートは、微笑んだ。

「ヴィオみーけつ。」

一拍置いて、花の向こうから少女が出てきた。

白金の髪に青い瞳、整った顔立ちはりシェーネにそっくりだ。

「見つかった。」「

ヴィオは、可愛らしく舌を出した。

その仕草に、アルバートは笑みを深めた。

「母上が呼んでるよ。」

アルバートのその言葉に、ヴィオの顔は輝いた。

「今行く！」

「お母様ー。」

ヴィオが叫びながらリシェーネに走り寄る。
その顔には笑みが浮かんでいる。

「ふふっ。そんなに走っちゃだめよ。」

そう言いながら、ヴィオに抱きついた。
アルバートがヴィオの後ろからゆっくりと、歩いてきた。

「今日は八歳の誕生日なんだから、大人しくしていなさい。」

「はーい。」

アルバートとリシェーネは、ヴィオの元気の良い返事を聞いて微笑んだ。

「駄目だ。」

リュシオンは読んでいた書類を投げ出した。

「他は。」

「これで最後です。」

年寄りの宰相が、最後の書類を渡す。

書類を読んだリュシオンは、ニヤリと笑った。

「こいつだ。」

「ですがその方は…。」

「良い。俺が交渉しよう。用意しろ。」

「はっ
」

宰相と共に、リュシオンは部屋を出た。

部屋に残ったのは、リュシオンが呼んでいた書類。

書類に書かれていたのは、アルバートの花嫁候補、アイネアス・

アベカシス・ロンリ。

隣国、ロンリ国の第一王女だ。

ヴィオの彼氏（前書き）

遅くなってごめんなさい。

ヴィオの彼氏

「ヴィオーー。」

中庭にリシエーネの声が響く。

リシエーネは辺りをきよろきよろと見回し、ヴィオレーヌを探していた。

「何処に行ったのかしら…。」

リシエーネは頬に手を添え、首を傾げた。

「あつ、あそこかも。」

リシエーネが向かった先は、中庭の中心にある樹齢9000年の大木。

そこはかつて、幼いリシエーネがダルドと出会った場所。リシエーネはバイオリーニの呪いにより覚えていないが、案の定、そこにはヴィオレーヌがいた。

リシエーネがヴィオレーヌに声をかけようとしたその時、聞き覚えのある男の声がリシエーネの耳に入った。

「母親は元気か？」

「うん。」

その質問にヴィオレーヌは微笑みながら嬉しそうに答えた。

(誰と話しているのかしら?)

「ヴィオレーヌ。」

リシエーネが呼ぶと、ヴィオレーヌはリシエーネを見て微笑み、リシエーネの元に駆け寄ってきた。

それと同時に、木の陰から男が出てきた。

銀の髪が日の光を浴びて輝き、青い瞳は何処までも深く、顔はとても整っている。

「ヴェルーナ。」

そう呼ばれた瞬間、リシエーネの頭にダルドとの記憶がよみがえった。

バイオリニーの呪いは、何年もたって弱まっていたのだ。

「ダルド…。」

二人の間に居るヴィオレーヌは首を傾げている。

「ダルドって誰？ヴェルーナって誰？」

と言いながら。

「あつ、お母様、彼の事知ってるでしょ？」

ヴィオレーヌがダルドを指差す。

「え、ええ。」

「彼ね、私の彼氏なの。」

と、ヴィオレーヌが微笑みながら言う。

「えっ…。今何で。」

「だから、彼氏なの。」

「彼氏？」

その言葉を聞いた瞬間、リシエーネの頭は真っ白になった。

親子喧嘩（前書き）

どうも皇月です。

後三話ほどで完結いたします。

三話かどうかわからないけど……。

ではどうぞ。

親子喧嘩

「どっぴいっことだ！」

滅多に怒鳴らないリュシオンが大きな声で怒鳴った。

「何度言えば分かるの？ゾーエ・セオスが私の彼氏。」

ヴィオレーヌが呆れながら言った。

「アイツがお前の彼氏？例え神でも許さん。」

リシエーネは、大きくため息をついた。

「ヴィオ、ゾーエ・セオスは神様よ。分かってる？」

「うん。それを含めて彼が好きなの。」

ヴィオレーヌが幸せそうに息を吐いた。

リュシオンはそれを見て、更に怒った。

「冗談じゃない。もし、ヴィオとあいつが結婚したら、あいつは俺の息子になるじゃないか！」

「問題はそこなのね……。」

リシエーネは更に大きなため息をついた。

「良いじゃないか。」

「そうですよ。」

アルバートとその嫁でロンリ国第一王女、アイネアスがリュシオンをなだめようと言った。

「良くない！」

リュシオンは更に声を張り上げた。

そんなリュシオンに、リシエーネは微笑みながら言った。

「リュシオン、ちょっと黙ってくれる？」

「うっ。」

リシエーネは顔は笑っているが、目は笑っていないかった。

「ヴィオレーヌ、何か言うことは？」

「ご、ごめんなさい。でも、彼を愛してるの！」

「それは分かったわ。でもね、相談してくれてもいいんじゃない？」

リシエーネはそう言い、愁いの表情を見せた。

「ごめんなさい。」

「そんなに謝るならいいわ。許してあげる。ダルドとの事も。」

リシエーネのその言葉に、リュシオンは反論をした。

「いいわけないだろう！」

「リュシオン。」

リシエーネはまた微笑んだ。

「うっ。わ、分かったよ。」

「本当！」

「ええ本当よ。」

リシエーネのその言葉にヴィオレーヌは子供のように喜んだ。

「その代わり、年相応の振る舞いをしてね。ヴィオももう十五なんだから。」

「うん。」

ヴィオレーヌは素直に頷いた。
リシエーネは頬笑み、リュシオンは不満そうな顔をした。

「すっかり父さんも落ちぶれたね。」

親子喧嘩をしている横で、アルバートがアイネアスにそう言った。

「本当ね。」

二人は顔を見合わせ、微笑んだ。

嫁入りと孫

「ヴィオをよろしくね。」

中庭の大木の前で、リシエーネは目に涙をためながら言った。
ヴィオレーヌはウエディングドレスを着て、嬉しそうに笑みを浮かべている。

「ああ。」

ダルドが微笑みながら言う。
ヴィオレーヌが何かを探すように、きよろきよろと辺りを見回した。

「どうかしたのか？」

ダルドが首を傾げながらヴィオレーヌに問う。

「お母様、お父様は？」

「ああ、リユシオンなら五月蠅いから部屋に閉じ込めてきたの。」

リシェーネが微笑みながら言う。

「そ、そう。」

「そろそろ行くぞ。」

ダルドがヴィオレーヌに言う。

「うん。お母様、元気でね。」

「ヴィオもね。」

ダルドが指を鳴らすと、ヴィオレーヌとダルドは消えた。

「おばあさまー！」

銀色のふわふわの髪に、青い瞳の幼い子供がリシエーネに向かって走る。

リシエーネは走り寄ってきた子供に抱きつく。

「まあ、アドニス。大きくなったわね。」

そう言うリシエーネの顔には、しわが刻まれている。だが、とても六十歳には見えない。

「アド、何度注意したらわかるの。」

アドニスの後ろから歩いてきた白金の髪に青い瞳の美少女がアドニスに言う。

「いいじゃないか。」

アドニスが頬を膨らましながら言う。

「アンジェリカも大きくなったわね。」

美少女にリシエーネが微笑みながら言う。

「おばあさま、お久しぶりです。」

「こんなに綺麗になって。」

リシエーネがアンジェリカに言う。

「あら？ヴィオレーヌは？」

いつもなら居るはずのヴィオレーヌが居らず、リシエーネは首を傾げる。

「お母様は風を引いてしまつて…。」

「あなたたちは大丈夫？」

「はい。」

それを聞いてリシエーネは嬉しそうに笑つた。

「そう。アンジェリカ、アドニス、そろそろお帰りなさい。」

「え、でも…。」

「いいから。」

「はい。」

アドニスとアンジェリカは渋々帰つて行つた。

そんな二人をリシエーネは、微笑みながら見送つた。

最後の日（前書き）

どうも皇月です。

最終話です。

今まで見てくださった方、ありがとうございました。

それではどうぞ。

最後の日

「ゲホツゲホツ」

と、リシエーネがせき込む。

「大丈夫か？」

リュシオンが心配そうにリシエーネの顔を覗き込む。

「大丈夫よ。」

リシエーネがリュシオンを安心させるために微笑む。だが、その笑みは引きつってしまった。

「本当か？」

「ほんと……」

リシエーネはバタリと倒れた。

「リシエーネ！」

リュシオンは慌てて駆け寄る。
周りに居たメイドも慌てる。

「医師を呼べ！」

リュシオンがメイドに言う。
リュシオンはリシエーネを抱きあげ、ベッドに運ぶ。

「連れてまいりました。」

一人のメイドが息を切らしながら言う。
その隣には医師がいる。

「早くしろ。」

リュシオンが医師に声をかけた。
医師は慌ててリシエーネを診た。

「んっ。」

リシエーネはゆっくりと目を開けた。
視界に映ったのは、リュシオンの白髪交じりの髪と不安げに揺れる緑の瞳。

リュシオンはリシエーネが目を覚ましたのを見ると、嬉しそうに瞳を輝かした。

「リシエーネ！」

「リュ、シオン。」

「大丈夫か？」

「え、ええ。」

「そうか。」

リュシオンはそう言つと、嬉しそうに笑つた。

「うっ。」

リシエーネが苦しみ出したのはその晩。

「リシエーネ！」

「リュシオン様、もう手は尽くしました。残念ながら……。」
リュシオンの瞳が見開かれる。

「リュ、シ、オン。子供、たちを、お願い、ね。」

リシエーネはそう言うと、微笑んだ。

「リシエーネ……。」

リシエーネはゆっくりと目を閉じた。

リュシオンの頬に一筋の涙が流れる。

周りのメイドたちも泣きじゃくっている。

リシエーネ・ル・アヴェルトゥーダントン、定年七十六歳。

彼女が死んだあと、国中が泣いた。

～END～

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0037/>

神に気に入られた竜!!

2011年3月31日11時45分発行